一色青海遺跡

調査の経過　一色青海遺跡は、中島郡平和町須ヶ谷及び稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡は、一宮市街地から稲沢を経て平和町に至る三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防とその後背湿地上の荒蕪地に位置している。

周辺には、南東約1500ｍに尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡があり、７世紀から８世紀にかけて、この地域が尾張の中心的存在であったことをうかがわせる。また、北西約150ｍには、弥生時代の一色長畑遺跡やその西に続く跡ノ口遺跡がある。

後背湿地には、黒泥ないしは泥炭が堆積し、その層より弥生時代の土器を中心とした遺物がしばしば出土している。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、8800㎡を平成５年５月～平成６年１月にかけて実施した。

調査にあたっては、広い面積に加え。排土置き場やウエルポイント設置期間の関係により、調査区を第１図のようにＡ区(1750㎡)・Ｂ区(3200㎡)・Ｃ区(2530㎡)・Ｄ区(1050㎡)・Ｅ区（270㎡）の５区に分け、さらにＡ区をＡａ・Ａｂ区、Ｂ区をＢａ・Ｂｂ区、Ｃ区をＣａ・Ｃｂ区、Ｅ区をＥａ・Ｅｂ・Ｅｃ区と10小区に細分して調査を実施した。

調査の概要　調査の結果、検出できた遺構は、弥生時代中期末と中世の２期にまとまりをみることができる。前者をＡ期、後者をＢ期とする。

Ａ期の遺構には、方形周溝墓・竪穴住居・廃棄土坑などがある。方形周溝墓には。Ａａ区～Ｂａ区にかけて合計８基（Ａａ区５基・Ａｂ区１基・Ｂａ区２基）検出され、墓域を構成している。また、周溝の埋土中より、壺を中心とした土器がまとまって出土している。竪穴住居は８棟検出され、そのうち２棟は土器とともに炭化材が出土したことから火災住居と考えられる。そして、廃棄土坑については、Ａａ区ＳＫ09・23から大量の土器とともに炭化米やウリ・ブドウの種子・鯛の骨などの動・植物遺体も多数出土した。

Ｂ期の遺溝には、方形土坑・土坑などがあり、方形土坑は主軸方向の類似性が認められ、全調査区から検出されている。その数は約100基に達し、本遺跡の中世を代表する最多数の遺構となっている。

Ａ期の出土遺物としては、凹線文またはクシによる直線文・波状文などの文様を施した壺やタタキ手法による甕を中心とする弥生土器と石鏃・石斧・石剣などの石器がある。また、Ｂｂ区ＳＫ01では長さ10㎜、径２㎜の微小な管玉も出土した。

そして、Ｂ期はＡ期に比べ良好な出土遺物に恵まれず小片が多い中、外底部に墨書を施した北部系の灰釉系陶器が３点出土したことが目を引く。他に遺物は、土師器・貿易陶磁・銭貨などがあった。

（前田雅彦）

儀長町
色長畑町
色青海町
Ec
Eb
Ea
Aa
D
Cb
Ca
Bb
Ab
Ba
稲沢市外二町衛生組合
平和衛生処理場
井堀野口町
四社大神宮
稲荷社
井堀蒲六町
井堀高見
平和町総合運動場
井堀蒲六町
井堀植木生産組合
井堀江西町
天神社
県道馬

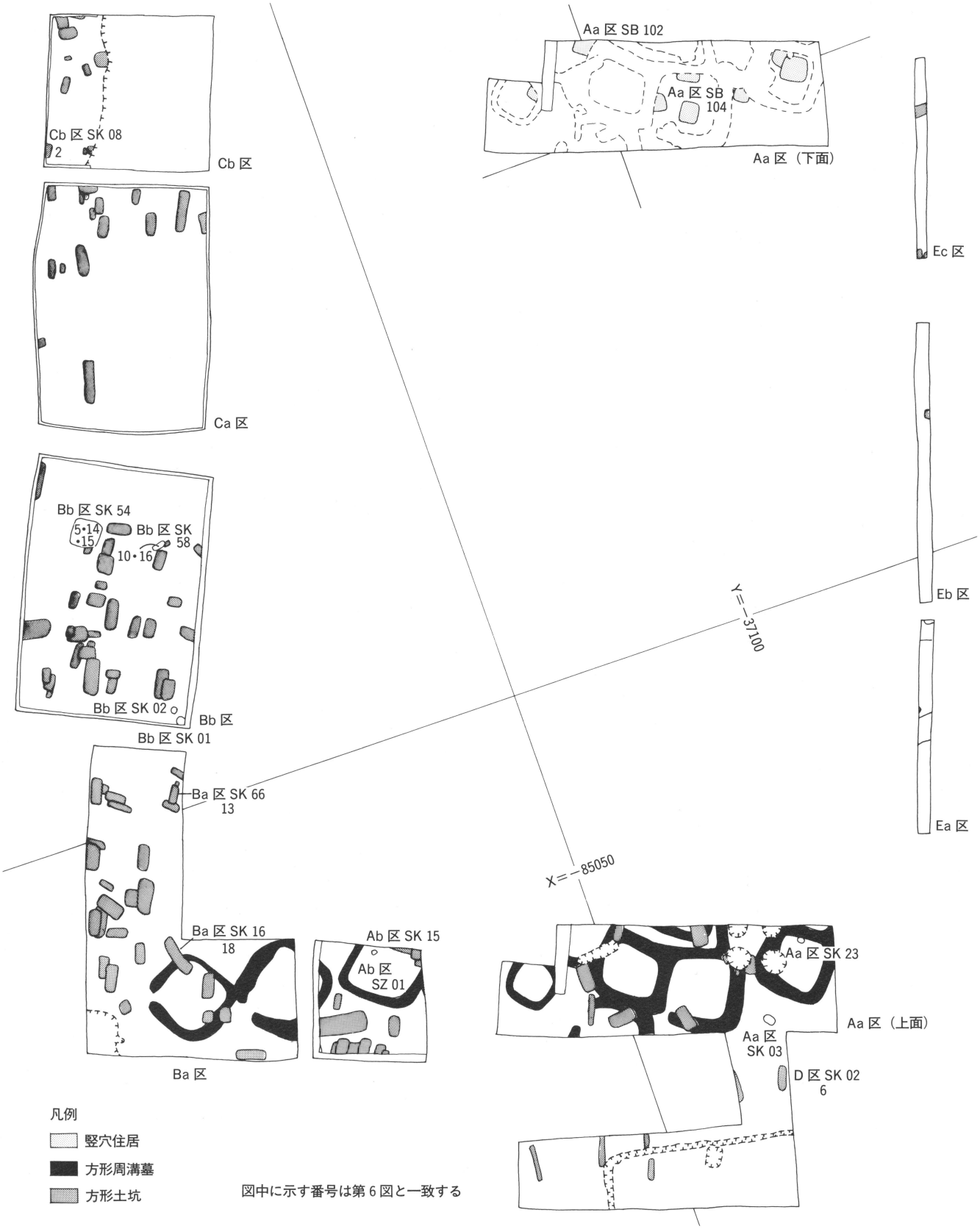
第Ⅰ図　遺跡位置図

遺構　今回検出できた遺構には、A期の竪穴住居・方形周溝墓・廃棄土坑、B期の土坑がある。これらの分布状況は、A区では密、C区・D区・E区では希薄となる。時期別に整理すると、B期の遺構が調査区全域に存在するのに対し、A期の遺構Aa区・Ab区・Ba区を中心とし、Ca区・Cb区・Bb区では希薄となる。なお、全体的にD・E区では遺構が希薄であった。これはD区では検出面とした灰色細砂層が東側に向けて高度が下がり、微高地の東端部に該当し、E区では前面に遺構検出面が数十cm程度削平を受けているためである。

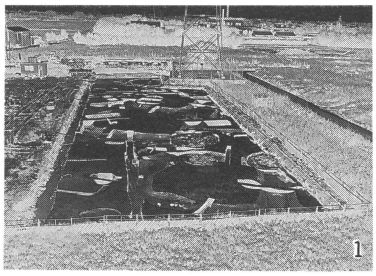
A期の遺構　A期の遺構は、検出面の違いにより下層をA－1期、上層をA－2期と区分する。

A－1期の遺構は、竪穴住居・土坑で構成される。分布範囲はAa区を中心としている。竪穴住居は8棟検出できた。平面形がいずれも一辺4m程度の隅丸方形である。このうち2棟（Aa区SB102・同SB104）は、いわゆる「火災住居」で、いずれも床面が被熱し

第2図　Aa区SB102（S＝1/40）



第 3 図　遺構略図（S＝1/2000）

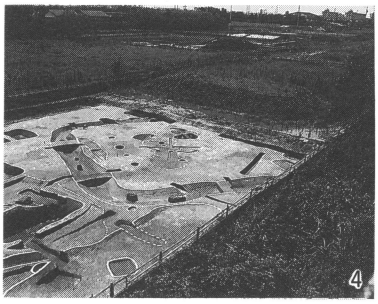


Ａａ区上面全景

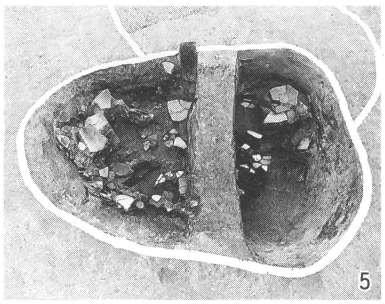
Ａａ区　ＳＢ102

Ａａ区　ＳＢ104

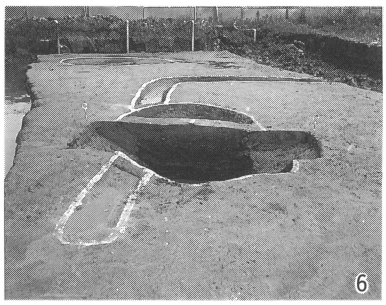
Ａｂ区　ＳＺ01



廃棄土坑Ａ
Ａｂ区ＳＫ15



廃棄土坑Ｂ
Ａａ区ＳＫ09



第４図　遺構写真

ているほか、炭化材が放射状に出土し、「垂木」等の上部構造材であったと考えられる。また、Ａａ区ＳＢ102（第２図）では、一部の土器が垂木の下側から出土していることから、住居が放置された後の出火ではなく、使用段階の出火であった可能性が強い。

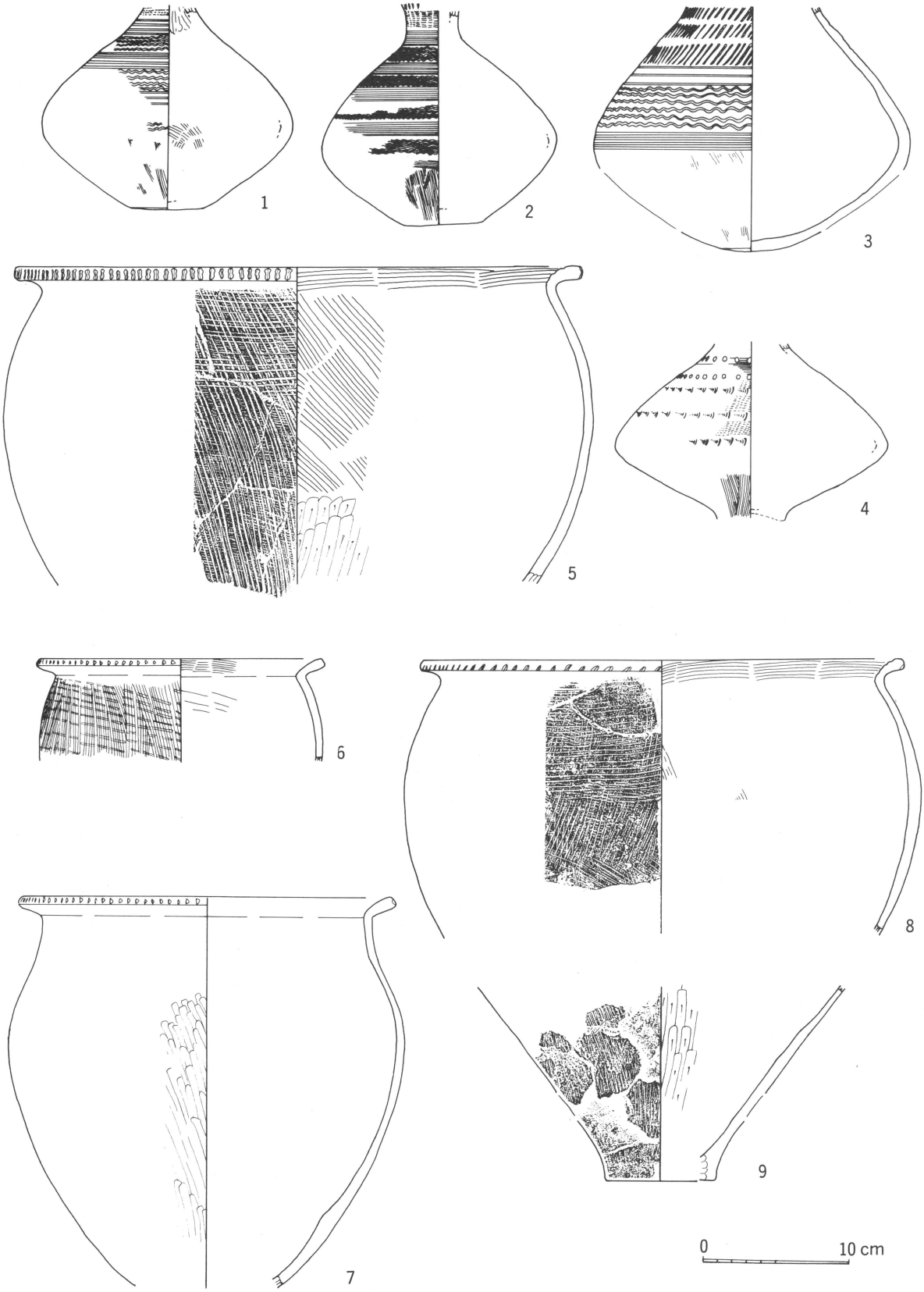
Ａ－２期の遺構では、Ａ－１期の遺構面の0.2m程度上層が検出面である。具体的には方形周溝墓・土坑・溝で構成される遺構群となる。分布範囲はＡａ区・Ａｂ区・Ｂａ区を中心とする。方形周溝墓は８基検出された。一辺12m程度と、一辺７m程度の二種類の規格がある。また、方向に類似性が認められ、一部は周溝を共有する。土坑は多数検出されているが、注目できるものに廃棄土坑がある。廃棄土坑は、平面形が円形ないし楕円形で、検出面からの深さが0.5m程度のものを廃棄土坑Ａ、平面形が直径１m程度、検出面からの深さが、１m程度のものを廃棄土坑Ｂと区分する。廃棄土坑ＡはＡｂ区、Ｂｂ区で３基検出された。基本的に埋土は１層で、大量の土器を出土することが特徴である。廃棄土坑ＢはＡａ区の北東部分で２基検出された。埋土は「縞」状の堆積物で、炭化米をはじめとする動・植物遺体が出土している。

Ｂ期の遺構　Ｂ期の遺構は、方形土坑が検出数約100基検出され、最も多い遺構となる。良好な出土遺物が得られない場合がほとんどで、年代を特定することは困難であるが、灰釉系陶器が出土する例がある。方形土坑は細分すると、方位の類似性から主軸をＮ－45°－ＥまたはＷ－45°－Ｎとするものと、Ｎ－75°－ＥまたはＷ－75°－Ｎとするものの二つに区分できる。ここでは前者をＡ群、後者をＢ群と呼称する。Ａ・Ｂ群の差は、分布域に現れ、前者が調査区の全域に分布するのに対し、後者はＡ区・Ｂａ区など、調査区の東側部分に集中する。ただしＤ区でこれが確認されていないことを考えると、方形土坑Ｂ群は、やや狭い範囲に限定されたものであった可能性が高い。いずれも出土遺物は乏しいが、少量の灰釉系陶器（第６図－２・６・13・18）がある。

そのほかのＢ期の遺構としては、形状などに共通性がみられない土坑がある。大半は直径１m未満、検出面からの深さが0.2m未満の規模である。その中でもＢｂ区ＳＫ54・同ＳＫ58は比較的大型の土坑である。前者からは第６図－５・14・15、後者からは同16が出土している。

遺物　今回の調査で出土した遺物は、コンテナー約200箱（一次整理段階）を数える。内訳は、土器・石器・金属製品があるが、土器が最も多い。時期的にはＡ期に属するものがほとんどで、Ｂ期に属するものは数箱を数えるに留まる。以下、遺物について時期別に説明を加える。

Ａ期の遺物（第５図）　Ａ期の遺物には弥生土器・石器などがある。掲載した資料は、いずれもＡｂ区ＳＺ01周溝から出土。器種には壺と甕がある。１～４は壺。いずれも口縁部を欠く。肩部を中心に、クシによる直線文・波状文・刻目文・簾状文・扇型文などを施す。５～９が甕。９は平底。８・９は同一個体となる。口唇部には、クシによる刻目文またはオシビキ文を施す。外面調整は、５・６・８・９がハケメ調整によるが、６はタタキ調整も施す。７は斜方向のやや幅の広いミガキ調整である。



第５図　Ａ期の遺物

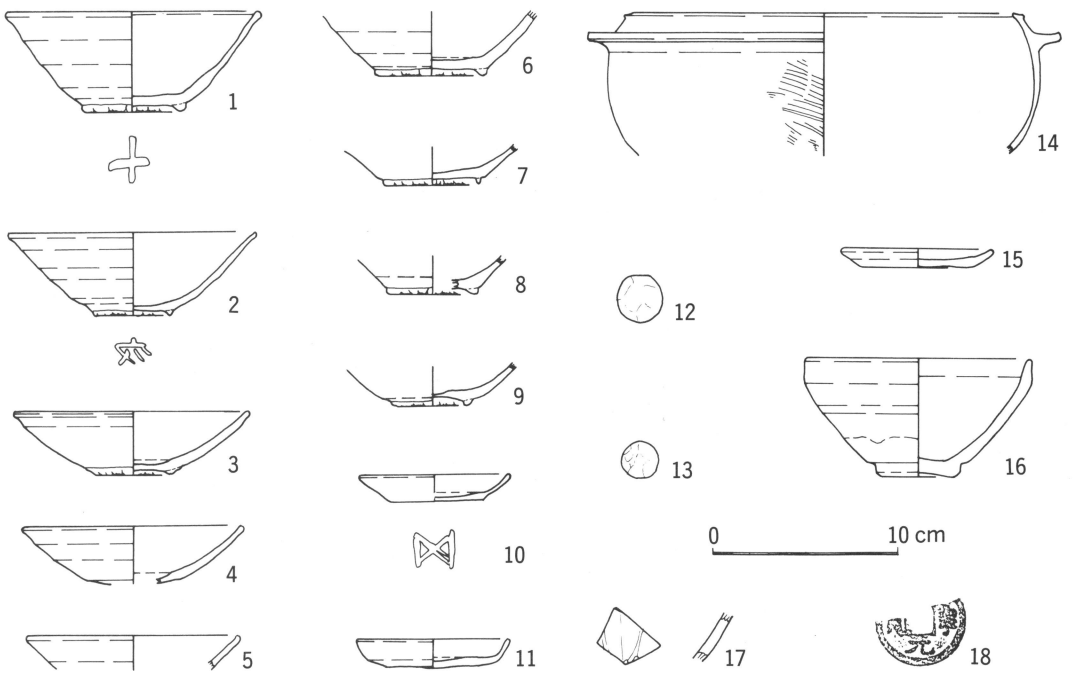
Ｂ期の遺物（第６図）　Ｂ期の遺物には灰釉系陶器・土師器・施釉陶器・銭貨などがある。第６図には遺構資料の他、包含層資料も図示した。１～13は灰釉系陶器。１～９は椀。いずれも北部系。１～３は外底部に墨書が確認される。１は『十』。２・３は判読できない。出土位置は、２がＣｂ区ＳＫ08、５がＢｂ区ＳＫ54、６がＤ区ＳＫ02。10・11は小皿。やはり北部系。10は、外底部に墨書を確認できるが判読できない。出土位置は、10がＢｂ区ＳＫ58、11がＢｂ区ＳＫ37。12・13は陶丸。13はＢａ区ＳＫ88出土。14・15は土師器。14は羽釜。体部外面の調整はハケメ調整。15は小皿。手づくねによる。いずれもＢｂ区ＳＫ54出土。16は施釉陶器。器種は椀。Ｂｂ区ＳＫ58出土。17は貿易陶磁。青磁で器種は椀、18は銭貨。北宋銭で熙寧元宝（1068年初鋳）。

まとめ　今回の調査成果と課題を以下にまとめる。

１．Ａ期は弥生時代中期末（高蔵式期）に限定でき、ごく短期間である。通常言われるように、当地域ではこの段階にこうした集落がいくつか知られている。また、一方で大規模集落が混乱する事実も指摘されており、この段階が社会的な変容期に該当する可能性が高い。一色青海遺跡は調査面積が8800㎡にも及ぶ関係上、こうした短期間の遺跡についての実体を把握する好例となり得よう。

２．Ｂ期の方形土坑は主軸の違いにより、Ａ群・Ｂ群と区分することができた。これを過大評価すれば、本年度の調査区は大きく二つの概念で方形土坑が形成されたこととなる。分布状況の濃淡とあわせ、方形土坑の性格を判断する上で何らかの参考になると考えられる。

（池本正明）



第６図　Ｂ期の遺物